

## 第2回 国体そして全日本選手権へ

2017年3月号の連載「私の稽古法」に掲載された拙稿がご縁で始まった連載である。私のようないかげんな弓道人が今後出ないように、自戒も含めて、お読みいただける方々に、反面教師として捉えていただければありがたい。

弓道という、ここまで打ち込めるものに出会えた私は、文字通り「死ぬまで弓道」を模索する。未熟な取り組みの数々は、例えるなら「幸せ」としか言いようがないだろう。筆舌に尽くしがたいのだが、何とかしてこの「幸せ」を今回もお届けしたいものだ。

## 1 弓道における転機② 奈良国体

奈良教育大学弓道部で、「国体への挑戦」を、顧問井上哲夫先生は快く許して下さい、私は1984年に開催される奈良国体に向けての強化選手に選出された。そして、これが、弓道の奥深さや難しさにまだ気づかず、ひたすら夢中で中<sup>あ</sup>でていた私にとって、非常に大きな2度目の転機となるのである。

国体強化練習は竹村邦夫<sup>たけむらくに お</sup>監督のもと、団体戦を勝ち抜くために、年間1万射引くことがチームに課された。竹村先生曰<sup>いわ</sup>く、「1万本引けば、引く前の問題は、いつのまにか解消される」。働きながらの1万射である。頭<sup>あたま</sup>がくらくらしした。

精神的にも技術的にもレベルアップが要求され、それまでやっていた楽しい弓道とは全く異なる厳しい世界が眼前に広がった。遠征、合宿、費やされる強化費。内外からの様々な期待とプレッシャー。現実の失敗や、まだ見ぬ未来の恐ろしい結果におびえながら、それを振り払うかのようにひたすら引く毎日。大会1カ月前を切る頃には、私は、食事も喉を通らない有様だった。

断捨離できずに未だに持っている当時のノートを見返すと、様々なメモの中に散見されるのは、「勝ちたい、中てたい」という卑近な欲求の増大に対して、必ずしも的中が比例していかないという現実と、それを打破するには自分の射に集中するしかないことを示唆する無数の叱咤しつたや箴言しんげんであった。国体に限らず競技での取り組みが、正射必中と相容れないかのような指導は、私には出来ないのだが、それは、このメモにルーツが窺うかがえる。「勝ちたい。それは誰でも勝ちたい。でもそれを抑えて自分の射をする」と書いた私のメモの横に、誰が書いたか「俺（私）もそう思う」という賛同があり、当時の我々の一生懸命さが懐かしい。しかし、技量は未熟なくせに、負けん気だけは強い若い我々の取り組みは、まだ正射必中と的中至上主義の間をフラフラしていた。

それでも地元開催のプレッシャーをはねのけ、奇跡的にチームが遠的・近的ともに優勝できたのは、日本一の稽古をすれば、日本一は不可能ではないこと、そして、個人戦では決して味わうことのできない団体戦の真骨頂、いわゆる一人の力が無限大に増幅されるチーム力が発揮されたことを表している。

特に、静岡県との7度にわたる遠的決勝射詰（国体遠的は現在得点制だが、当時は的中制）は、決着のついたのも気づかなかったほど集中し、さらにどんだん矢所が固まっていったと聞

いた。要するに、「何も考えずにひたすら引いた」のである。この「無心に、ひたすら引く」との難しさは、弓道人の多くが直面するが、「雑念にとらわれずに引く」ために、当時、竹村先生が指示された年間1万射は、若く未熟な我々に一番効果的だったのだろう。「中てる機械」にはなりきれなかったが、「勝ちたい」という雑念を乗り越え、自分の射を全うするには、1万射の実績が心の拠り所になった。竹村先生は、下手くそな我々に必要なものを的確に把握されていたのだ。弓道の技術も大事だが、内面的な取り組みこそ大事だと骨身に沁み、このかけがえない経験は、1984年、23歳のことだった。

ここまで振り返って、夫と出会ったのもこの頃、国体強化練習がきっかけだったことを懐かしく思い出した。後の沖縄国体には一緒に出場したが、個人の取り組みに理解のある比較的休暇の取りやすい業種とは異なり、民間企業の、それも3交替制の勤務を続けながらの弓道だったことを覚えている。それは、彼の自負でもあったが、国体などに全く無縁の業種で弓道を続ける、それも全国大会クラスの練習を年間通して続けるということは並大抵のことではない。民間企業で働く多くの弓道人が直面するこの課題を声高に披瀝することもなく、彼は静かに、しかし熱心に取り組んでいた。それは、民間企業に勤める幾人かの先輩弓道人の存在と取り組みがあったからで、同じように頑張っている先輩弓道人の名前をよく挙げては、先輩に負けじ

と、弓道の「競技的側面」に理解を得にくい職場の状況に立ち向かっていた。

「競技的側面」とは何か。現実問題、国体出場となると、1週間近く休みを取らなければならぬ。やや卑屈な見方をすれば、有給で遊びに行くかのように上司に思われながら、カバーしてくれる同僚に肩身の狭い思いをしながら、だ。それだけでも大変なのに、世間の休みとは無縁の3交替勤務の彼は、土日祝日に容赦なく入る遠征・合宿等に、夜勤明けの疲労を押して睡眠時間を削り、運転なども買って出、まさしく若さのなせる業としか言いようのない取り組みぶりだった。働き盛りの企業戦士たちのそういった全国大会クラスの競技への取り組み状況（いわゆる弓道の競技的側面における問題点）は、男女を問わず現在もあまり変わっていないのかもしれない。また、残業が終わって道場に行くと、既に閉館時刻が迫っていて十分に稽古できないという声も耳にする。働き盛りに限らず時間の捻出には誰もが苦労しているのだ。だからこそ、弓に取り組もうとする全ての働く弓道人には、本当に頭が下がる。あるいは家庭と両立させながら、あるいは介護と両立させながら、様々な困難と直面しながら、それでも弓を続けたいと思つて下さる全ての弓道人の熱意に私は敬意を表する。

いつか弓が引ける状況になったら、弓道場に戻りたい。転勤してもその地でまた弓を続けたい。その熱意は先達から後進に静かに脈々と受け継がれ広がってゆく。若い頃の夫のモチベ―

シヨンは、確かに「頑張る先輩弓道人の後ろ姿」だったと思う。そういった「継続したい」と思わせる魅力ある弓道人の存在が、また、一筋縄ではいかない弓の難しさが、趣味としての弓道であれ、武道としての弓道であれ、生涯継続させるモチベーションとなっているのだと、今しみじみと感じる。

## 2 弓道における転機③ 全日本選手権初挑戦

さて、弓道における次の転機は、翌1985年、竹村先生から全日本選手権（以後選手権、または天皇盃、皇后盃と表記）挑戦のお誘いを受けたことで訪れた。選手権は、東京と三重県伊勢市で隔年毎に開催され、幾多の変遷を経て、現在は予選<sup>ひと</sup>一手2回（合計4射2中以上の的中が必要）の採点制により上位20名が決勝に進出、決勝は10射（一手5回）の的中制によって決し、優勝者には天皇盃・皇后盃の下賜<sup>かし</sup>が行われる。国体の団体戦とは異なり、個人戦であり、各都道府県予選・ブロック予選を経て、全国から100有余人の代表が参集する。

弓界の最高峰の大会だけに、中てるだけの射では通用しないことや、国体に出たぐらいの五段が体配（基本の姿勢、基本の動作などの基本体を中心とする、射形や射技以外の動作のこ

と)の何たるかを理解できていないはずもないことは、指摘されるまでもないことだった。そこで私は、当時奈良県のみならず、日本の女子弓界を牽引けんいんされていた増田美和ますだみわ榮先生のご指導を仰ぎ、なんとか1986年、24歳で錬士を戴き、県予選は辛くも突破することができた。しかし、身に染みついた競技中心の弓道の様々な欠点によって、射技体配はもちろん、取り組み姿勢、立ち居振る舞い、弓への造詣全てにおいて増田先生も竹村先生もあきれられるくらいの未熟さを露呈していた。



岡崎廣志先生  
(第37回全日本弓道選手権大会決勝)



山下三ヶ十先生  
(第37回全日本弓道選手権大会決勝)



第19回全日本女子弓道選手権大会  
決勝に挑む筆者

そして9月、持ち前の楽天さから、とにかく当たって砕けると簡単に考えていた私を打ちのめす事態が待っていた。先に開催されていた天皇盃の決勝を観戦した私は大変なショックを受ける。前年度最高得点者の山下三ヶ十先生やましたみかずと今大会最高得点者の岡崎廣志先生おかざきひろしの両者10射皆中の決勝。もちろんお二人のそんな素晴らしい弓歴を知らぬ私は、眼前に繰り広げられる今までに見たこともない迫力の射に言葉を失った。お二人とも15秒以上はあろうかという深い会かい。伸び合いに妥協はなく、そこにあるのは圧倒的な真善美。私は、自分の弓道に対する取り組みや

考えの甘さに愕然がくぜんとした。そして、

これが弓道であると弓の神様に厳然と突きつけられ、再び荒々しく突き放された気がした。中てたいという卑こ小な拘泥こうでいはどこにもなく、私のような未熟者の立てる舞台ではなかった。

しかしながら逃げ出すこともできず、開き直ってひたすら引いた私は、





喜びにわく（左から3人目が筆者）



第19回全日本女子弓道選手権大会で優勝

女子が10射の決勝になってから初の皆中で初出場・初優勝した。しかし、男子のずば抜けた射品射格に比べ、女子のレベルを下げた未熟な射技体配で、穴があつたら入りたい気持ちで一杯だった。

その後、今に至るまで、この時目に焼き付けた天皇盃決勝は、私が目指す境地であり、迷った時のゆるぎない指針であり、いつか女子もこういう決勝をやらねばと不遜にも決意した、弓道における最大の転機となった。

今にして思えば、24歳、弓歴たった9年の私が、このタイミングでこの決勝を目撃したことは、天の配剤と言えるかもしれない。「運命的」という表現は、根拠のない恣意的な選択を表しているという意見もあるが、前述した弓の神様は本当にいらつしやるような気がしてならない。この決勝を目撃していなければ、ここまで弓を続けていなかったかもしれないし、後年のチャレンジはなかったかもしれない。天の配剤

を調合しているのは弓の神様で、後年、私はそう感じざるを得ない状況を、幾度も体験する。運命だか必然だか、弓の神様の手のひらの上に自分がいる、と言えば大げさだろうか。

### 3 弓道における転機④ ブランクと復帰

翌1987年結婚した私は、出産育児の傍ら、1999年、38歳まで奈良県で弓道続けた。子連れであちこちの大会に出かけたり、騒ぐ子供が迷惑ならぬよう個人の道場を貸し切りで使わせて頂いたり、この頃は、多くの支えがあった。子連れの弓道に、皆温かい手を差し伸べてくれ、優しい眼差しまなざしを送ってくれたものだ。

1999年、夫の転勤で京都府福知山市ふくちやまに転居。慣れない土地で仕事や育児に追われ、あつという間に9年の月日が流れた。一方で婦人科の病で体調を崩し、弓は全く引けずにいた。やがて娘が弓道に興味を示し、福知山市弓道協会を訪ねたが、結局娘はやらす、これを機に、体調が戻ってきていた私が家族の協力を得て再開することになった。2008年春、もう46歳になっていた。当時、教職に転職して2年目、ようやく福知山の地に落ち着いてきた頃だった。やはり、住めば都と言っても、それぐらいの期間はかかるのだろうか。

福知山市弓道協会に入会したことは、弓道における第4の転機となった。福知山市弓道協会には、国体や選手権の経験者もおられ、趣味として楽しむ方、真剣に昇段・昇格を目指す方等、様々な弓道人で溢あふれていた。度々水害に見舞われながらも不死鳥のように蘇よみがえる道場は、100円の利用料で一日中引け、とにかく皆熱心で、温かく迎え入れて頂けた。私は喪うしなった自分のアイデンティティーを取り戻そうとするかのように仕事の合間に必死に通い、「もう一度国体や選手権の舞台に立ちたい」一心で稽古した。2009年六段、2010年教士を戴き、その甲斐かあつてか、2009年から今まで連続して皇后盃京都府代表として選出して頂けたが、たった一度、無念の欠場となったのが運命の2012年だった。その年の9月、選手権の1週間前に、私は急性大動脈解離という病で弓道の試合中倒れた。私の人生における岐路が、48時間で50%の生存率という形で突然訪れた瞬間だった。